

Title	The Dynasts に於ける「意志」の世界の芸術的表現 : Spirits
Author(s)	高橋, 弥生
Citation	Osaka Literary Review. 5 P.13-P.28
Issue Date	1966-07-01
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25804">https://doi.org/10.18910/25804</a>
DOI	10.18910/25804
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## *The Dynasts* に於ける

### 「意志」の世界の芸術的表現

#### — Spirits —

高橋 弥生

*The Dynasts* の与える新たな興味は、Hardy の Will の世界とは如何なるものかという事よりも、むしろ Hardy が如何にして Will の世界を芸術作品の中に取り入れたかという事にある。この作品のト書き、黙劇、韻律、Spirits (精霊) の世界、imagery 等に見られる細かい工夫に、Hardy が、Will の世界の vision を視覚化し、或は一つの tone として我々の直観に訴えようとしている意図がうかがわれる。Hardy は今や、写實的、唯物的な物の見方を離れて、心のとらえる拡大な形而上的世界像の展開を試みているのである。

表題の「意志の世界の芸術的表現」とは、Will の世界の創造にあたり、作者が詩劇の持つ種々の devices を如何に利用しているかという事を考察する為につけたものであるが、多くの devices の中でも、Spirits と imagery とは、この epic-drama の構成と tone に主観的統一を与えている Hardy の宿命論の媒体として、又、closet play の特色をよく生かしているものとして、特に興味ある要素と考えられるが、この小論にては、Spirits のみをとりあげてみる。

尚、“Will の世界”とは Will そのものとは区別される必要があり、Will 及びその Will により出現する現象界を指し、又、別の見方をすれば、Hardy の宇宙論がうち立てた世界像でもある。

二十世紀への敷居をまたいだ Hardy は、彼が宇宙の根源力とする甚しく認識困難な Will なるものを allegory としてさえ擬人化せず、この劇の配役からはづし、そのかわり、あくまでも Will が劇の進行を司るものである事を示す為、出来る限りの近似的表現を用いて Will の作用の描写に努めている。Hardy は人間と Will との間の関係を drama の

中で示すにあたり、第三者的視野を持つ天上界を導入した。作品の形式より見て、この天上界はギリシア悲劇のコーラスを連想させるが、その内容性質は多に異なる。天上界の Spirits は “supernatural spectators” であり “contrivances of fancy” (Preface) であって、現象界に対してその裏にある Will の世界 “*the Back of Things*” (*The Dynasts*, III. VIII. vii) を見せてくれる鏡である。鏡は何でも映し出すが、その映し出す内容には鏡自身何らの力も及ぼす事が出来ぬ如く Spirits は人間の目に見えぬ世界を克明に描き出すが、そのとらえる事態が如何に悲惨なものであっても、手を加える事は出来ず、Will の示すままの世界を映すのである。たとえば、drama 中での Spirits の虚構性が高じて、時折彼等は人間に直接語りかけるが（心霊作用）、それも Will からの衝動の伝達を単に象徴しているのにすぎない。

だが spiritual で象徴的な存在物として、彼らには人間や宇宙のどの面に目を向けるかという自由は各々の性格にもとづいて持って居り、たまたま彼等の選ぶ対象はきまって宇宙構造の外観ではなくて内面であり、又彼等はいつも形而上的抽象概念ばかり語るわけではなく具体的な事件を頻繁に叙述するがその時も人間界の明るい面ではなく、あらゆる矛盾、災難の渦巻く暗い面である。Spirits の語る内容は抽象概念であれ、具体的な事件であれ内容の本質に変わりがなく、広い視野と深い洞察力のとらえたあらゆる事象の本質、真相である。

この Spirits の語る部分と、その他の部分、言い変えると *The Dynasts* 中のイタリックの部分とその他の部分とは如何なる関係にあり、どのように又、どのような Will の世界を象徴しているかという事を今から考察してみたいと思う。

Spirits は各々個性を与えられているが、その個性化を超越したより高次の段階に於て、下界の人間界の事象に対立するものとして彼等のとらえる世界には共通性がある。*The Dynasts* にては地上の人間界は単なる現象界として現在のみを、形而下の世界のみを、つまり宇宙の外観のみを示す。これに対し、Spirits は、前にふれた如く、物象の形而上的関連性、Will を根源とする宇宙の内部構造等、外観の下にある事象の真相をとらえる。

今に、第一部第一幕三場例をとってみる。ここは英国議会の場で、Pitt

の提案による対仏国防条例に関する、与野党間の激しい議論が行なわれているが、この場を傍観していた Spirit of the Pities は、“*It irks me that they thus should Yea and Nay / As though a power lay in their oraclings, / If each decision work unconsciously, / And would be operant though unloosened were / A single lip!*” とのべ、Spirits の目から見ると、人間共が、与野党に分れて激論を斗かわせるのも無駄であって、すべては Will の定めた方向にしか進まぬ事を示す。戦争の勝敗も名将の作戦にて決定するものではなく、Will の加胆した方が勝利を得る。作戦計画に迷うオーストリアの Mack 将軍を見て Spirit Sinister は Will が彼を動揺させていると嘲笑するが、彼は熟慮の上、大敗をきたすような戦略をえらんでしまい、いわゆる勘というもの、(この点で彼はとうてい Napoleon にはかなわぬのである) 及び、Napoleon が Mack をなぐさめて言う如く “*impish chance or destiny*” が勝敗を左右するのである。Waterloo の闘にておじけついた Wellington を見て Spirit of the Years はもうここまでくれば “*shaken and unshaken are alike / But demonstrations from the Back of Things*” といい Will が “*hauls / The halyards of the world*” (Ⅲ. Ⅶ. vii) とのべる。戦局は無数の要因が原因結果となって重なり合い必然的に一つの結末へと進むのであり、戦争の勝敗も Will の世界に織り込まれた既成の事実なのである。この点に関して Spirits の言葉をひろってみる。Semichorus of the Years は Will の世界の決定論を次の如く述べる。“*Ere systemed suns were globed and lit / The slaughters of the race were writ, / And wasting wars, by land and sea, / Fixed, like all else, immutably!*” (I. Ⅱ. v)。Semichorus of Ironic Spirits も同様に “*O Innocents, Can ye forget / That things to be were shaped and set / Ere mortals and this planet met?*” (I. Ⅶ. iii) と述べ、すべては “*Its preadjusted laws*” によって動く。Napoleon が英国侵入を己れに誓っても Chorus of Intelligences の言う如く “*If Time's weird threads so weave!*” (I. Ⅱ. iii) という条件つきである。Ulm の闘で大勝をおさめた Napoleon が敗戦国オーストリアの Mack 将軍の面前で自己宣伝をやり、フランスでは自分の一かぶりで、直ちに20万の義勇軍が自分の下に馳せ参じると述べ

ると Spirit of the Years は次のように言う。"So let him speak, the while we clearly sight him / Moved like a figure on a lantern-slide. / Which, much amazing uninitiate eyes, / The all-compelling crystal pane but drags / Whither the showman wills." (I. IV. vi). Napoleon の大げさな戴冠式も Spirits の言葉により、単なる "puppetry" と化してしまう。このように人間共が如何にも自信たっぷりと己れの意志を發表し、どこから見てもその言動が自由であるように見える時、Spirits は片はしから人間の言動を Will のものに帰属させてしまう。Hardy が人間を如何にも自由意志により動くように見せかけた事は逆説的効果を狙った irony であって、Napoleon には特にその効果があらわれているが、人間のみせかけの有力さと、真の無力さ、つまり外觀の世界と、真実の世界とが *The Dynasts* にては広大な cosmic irony としてとりあつかわれている。

このように人間の台詞と Spirits の台詞とが ironic な効果を出しながら、巧みに織り混ぜられ、表に現われる人間の言動を巧みに裏返して Will の作用へと結びつけてしまう Spirits の面白い働きは、全編を通して一つの定まった technique として構成の中にとり入れられている。しかも Spirit of the Years, Spirit of the Pities, Spirit Ironic 等は、各々の性格にもとづいた口調で語りはするが、彼等が目を向けているのは只一つ、Will の世界の真相である。かくして Spirits という鏡に映された人間界と、地上の人間界とは、我々の認識に閉された、"the Unknowable" な Will と人間の行為との関係を劇化し、いかにも自由に見える人間の行為も Will が己れ自身を "objectify" したものであるとするが、この思想を Spirit of the Years が明白に述べている。人間達は "dream / Their motions free, their orderings supreme ; / Each life apart from each, with power to mete / Its own day's measures ; balanced, self-complete ; / Though they subsist but atoms of the One / Labouring through all, divisible from none ;" (Fore Scene). 先天的に自分の行為を自由であると信じている人間が、後天的に経験を重ねる事により、自分が少しも自由ではなく、己れの認識のとどかぬ所で一つの必然律に支配されている事を悟る様も Spirits の介在による。Napoleon が世界征服の夢に耽っている折も折 Spirit of the Years は下界に向か

って不思議な光を放射し、Napoleon を始めすべての人間が Will の網にかかってうごめく様を卜書きにて示すと、Napoleon は突然次の如く述べる。“Since Lodi Bridge / The force I then felt move me moves me on / Whether I will or no ; and oftentimes / Against my better mind……” (Ⅲ. I. i). 自己にひそむ不安なまでに強烈な衝動を彼がふと感じたその内面の変化を Spirits は強烈な image へと視覚化し、あたかも Spirit の放つ Will の光にあたって彼が真の己れの姿に気付いたかの如くそれを劇化し、人間の本性を宇宙の本体の中深くうえつける。彼が Spirits により宿命的な自己の姿を見せつけられる最大の場面は、Waterloo 大敗後の彼と Spirits との対話であって、彼は Spirits からの spectral questionings にさんざんせめたてられ皮肉られ、とうとう本心を暴露し、フランスの為などという口実を捨て去って、空しい名誉心に駆りたてられていた事を率直に述べ Will に盲従していた事を示す。

かくて我々が Napoleon を Spirits のとらえ方にそって、つまり宇宙の内部構造から見る時、*The Dynasts* の中の外観的な人間界とは異なる一段と高次の体系の中に彼の位置を発見し、彼の持つ非人道的性格をも Will に属せしめ、一時なりとも彼を悪人として見る事を停止する事が出来る。しかし、人間は高度の理性、感情を持つ生物という意味に於て悪に責任を持たねばならぬ。つまり自我を離れた純粋な認識作用により、人間は形而上的の真理を知ることが出来るのである。この点は、後に述べる良心の苛責の所で明らかになると思う。

さて Spirits が人間の心の中へと更に入り込めば、そこに心靈作用が象徴され、ここに到って、Spirits の存在そのものもつ異様な面白さは最高潮になり、その威力は Gothic taste の域に達する。Spirits は人間に直接囁きかけ、人間の意識の奥深い部分の働きを dramatic に象徴し、Will の世界の芸術的表現の大役を果している。*The Dynasts* には一種の心靈作用と考えてもよい場面がしばしばあるが、その多くは Spirits の介在により、その内でも人間の死の予告は興味深く、人間は Spirits の予告の囁きを虫の知らせとして心の奥深くに聞きとる。たとえば Spirit of the Years が英将 Nelson に何かを囁くと、彼は話相手の Collingwood に次のように述べる。“And I have warnings, warnings,

Collingwood, / That my effective hours are shortening here; / Strange warnings now and then, as 'twere within me, / Which, though I fear them not, I recognize / ..... ” (I. II. i). そして彼は三幕あとで死ぬ。Perceval も死の予告を Spirits から聞く。死に限らず、不吉な将来を予感する人間の心理も Spirits の介在により白い海鳥や死の影など様々な形で視覚的に象徴され、そのかもし出す異様な雰囲気は、この作品の持つ tone の縮図とも言える独特なものである。死の予感を受けた者は、戦場にては死をさげようともせず、命知らずの勇気と無鉄砲さで先陣を切り、時には敵の弾をまともを受けて死に、自己破壊的行為へと Will に盲導される。Hardy が人間に死の予感を与えておいて、その死を表現していった手法の目的効果は Spirits の介在により明らかである。Will とは先にも引用文に示した如く、“*the One*”であり、しかも個別相を呈するあらゆる現象に内在する。従って時間空間というものは Spirit も “*What are Space and Time ? A fancy !*” と述べる如く、単に人間の認識の方式であり、Will そのものには適用されえぬ。Will とは “*The Eternal Urger*” “*The wheel which drives the Infinite*” “*The Unrelaxing Will*” であり、Schopenhauer も我々の認識作用に関して述べている個所で、時間空間、因果律に言及し物自爾は空間を占めぬもの、時間外に存するものである事を説いている。<sup>(1)</sup> Will は更に “*scoped above percipience*” でもあると *The Dynasts* の中ののべられている。このような Will の本性は、人間の無意識な部分を通して、意識の中にも伝わり、暗くてわけのわからぬ象徴的な感じを与える。この無意識の領域から意識の領域への流通を Spirits は見事に drama 化し、宇宙の心に通じる人間個人の心、及び人間の定命性を象徴的に描き出す。現象界にては偶然とみえる死も、Will の世界にては永遠の昔から定まったものである事を、この死の予感によくあらわしている。予感というものが Will の超時間性を示すものであれば、Clairvoyance や telepathy はその超空間性を示す。後者を例にとると、形而上的な Will の世界では、自分の will も他人の will も唯一なる Will に抱括されるものであってみれば、個人同志はこの共通の部分を通して互いに通じ合う事が出来よう。それ故この現象界にても稀にはあるが遠方に居る者の心中をそれとなく悟るという不思議な現象が生じ、この telepathy の伝わり方を

Spirits が象徴する。

今、空間的な面からみて人間対人間の telepathy とは少々異なるが、やはり telepathy の一種と考えられる人間対 Will の telepathy を Spirits が channel となってひきおこす場面をとりあげてみる。Trafalgar の海戦で完敗したフランスの提督 Villeneuve は、敵にも味方にも捨てられ今は自殺するのみと観念する。すると姿なき Spirit of the Year は彼の耳許で Will はもはやお前をこの世にひきとめようとはしていぬと次の如く囁く、“*The Will grants exit freely ; / Yea, It says “Now”……*” (I. V. vi). Villeneuve に内在する Will はもはや彼の体内では自殺以外に十分に自己主張はとげられず、仮の宿たる彼を捨て、死を許す。Villeneuve 自身は、自殺さえも Will の支配を受ける人間を象徴し、Spirit は、Will からの自殺許可の伝令を伝える channel として暗示力の強い Will の衝動をあざやかに象徴する。自殺に対する同様のとりあつかい方は Napoleon の場合にも見られ、彼は自殺に失敗して次の如く述べる。“*Fate has resolved what man could not resolve. / I must live on, and wait what Heaven may send!*” (IV. IV. iv).

心霊作用そのものは客観性に乏しく、神密性は濃く、濫用は避けるべきであるが、今だに科学では解くことの出来ぬもの存する事は明らかであり、Hardy は “*The Unknowable*” なるものを象徴するにあたって心霊作用を用い、近代精神に基く彼の意志哲学を Gothic taste を思わせる古い道具立に盛り、Will の持つ神密性を審美的に表現したものと思われる。彼は、Will の形而上的の同一性が、その現象界の形而下の差別相の世界にあらわれてくる一例である心霊作用を用いて、決定論を説いているのである。つまり Will が我々を動かすのは、人間の心の無意識の領分からであり、Spirits と人間とを心霊作用によって連結づける事により、Hardy は Will の支配を受ける人間像を描いた。

今までの考察にて明らかになった如く、Spirits のとらえる宇宙の姿は真実ではあるが救いのない世界であり、これを視覚的に言うと、たとえば good humor に漲る人間の台詞やト書き、黙劇の部分に対しては、暗く不吉でしかも鋭い諷刺を含んだ語句にあふれるイタリック体が、くっきりと浮び出す場面がしばしばあるという事になる。この点を端的にあらわし



ている場面をとりあげてみると、祭、祝賀会、結婚式、誕生など人間界のめでたい行事が進行している時には決まって、Spirits がその陰にある人生の暗い面をとりあげ、その場の雰囲気をつちまち暗くしてしまう。たとえば Prince of Wales の誕生日祝いと、スペインに於ける英軍の大勝利という二重の喜びに沸き立つ Brighton での dynasts の大宴会に対して、Spirits の aerial music は、異国 Walcheren の島の地獄のような沼沢地で、dynasts の空しい野心の為にむざむざと命を失ってゆく英国兵士達の悲惨な死をうたいあげ、ゆがんだ世相を嘆く。又、個人に焦点をあててみると、望み通りの男子出生に有頂点になっている Napoleon に向って、Spirit of the Years は次のように囁く。“*At this high hour there broods a woman nigh, / Ay, here in Paris, with her child and thine, / Who might have played this part with truer eye / To thee and to thy contemplated line!*”。Napoleon はそれに答えて“*Strange that just now there flashes on my soul / That little one I loved in Warsaw days, / Marie Walewska, and my boy dy her / —*” (II. V. iii) と独白する。かくてこのめでたい場面も庶子への言及の為に暗い影をひかざるをえぬ。Spirit の囁きは、Napoleon の心にふと湧いた連想を象徴し、良心の苛責から逃れえぬ Napoleon の姿をあらわしている。彼と Marie Louise との結婚式も Spirit Sinister が仏革命の露と消えた新婦の大伯母 Marie Antoinette の事を二人に無意識にかんぜしめた為、不気味で陰気な結婚式に終る。Spirits は成功に成功を重ねる Napoleon のなす事の裏にある暗い面、意志の強い英雄の内面の葛藤をとらえる。

この世に完全な幸福はなく、どこかに必ず矛盾や不幸が潜んでいるとする Hardy の人生観は、物象の外観のみを示す人間舞台の明るい場面と、真相を映し出す Spirits のとらえる暗い人生面という二重構造により象徴され、これはこの作品中の一つの technique となって全編に散在し、天上界と下界とからなるこの作品の構造の中に巧みにとり入れられている。そしてこの明暗の対比が Will の世界が本質的に悲劇の世界である事を示す。

今までの考察をまとめると、Spirits のとらえる世界は、外的な action

を示す下界に対して、その action をひき起す内面の世界であり、又、人間の言動に対する哲学的考察、解説、批判の声である。つまり Spiritsこそが舞台を操る Will のかげの働き、外観の下に広がる真相を語るのである。かくて天上界と下界とにそれぞれ与えられたかかる役割の組み合わせがかもし出す作品全体の調子が、或はその組み合わせそのものが Will の世界を浮び上らせる。この組み合わせの面白さを出す根本は、人間と Spiritsとの間に、宇宙の真理をつきとめる覚醒力及び活動範囲に程度の差がある事である。Spirits は超人的精神力、知力、予言力を持ち、彼等の現象界の拘束を破った空間的活動は、我々に快感を与えしめ、人間に対するその精神上及び物理上の優越性は Spirits ならではの奇怪な場面を展開し、彼らの存在意義を徐々に明らかにしてゆく。Spirits をひき立てるかの如く人間は、洞察力が弱く、自己本位的で視野も活動範囲も狭い。長い寿命を与えられた Spirits の見たものは Will を根源力とした生物の進化である。この点を Semichorus of Ironic は次の如く述べる。 “*we…… / Beheld the rarest wrecked amain, / Whole nigh-perfected species slain / By those that scarce could boast a brain ; / Saw ravage, growth, diminish, add, / Here peoples sane, there peoples mad, / In choiceless throws of good and bad ; ……*” (I. V. iii). 宇宙に住む生物は目に見えぬ程の虫けらでさえも豊富で精巧な技術と最大の熟慮とにより出来上った自然の創造物としか考えられぬが、Will の方から見ると、これらの者を造った力はあらゆる熟慮の正反対である猛烈な盲目的衝動により生れたものであって、しかも Will はその盲目的創造力に相応した無関心さでこれらの被創造物を破壊する。<sup>(2)</sup> 戦争は進化に見られるこの無意味な破壊行為の大規模なものであって、Will は一国を栄えさすかと思えば、他国をしてその国を滅ぼさせ、この無駄な Will の戯れに、無数の人命が失なわれ、Shade of the Earth が次の如く嘆くのも尤もである。 “*What boots it, Sire, / To down this dynasty, set that one up, / Goad panting peoples to the throes thereof, ……*” (I. I. ii). このように戦争の不合理性は人間によってではなく主として Spirits によってあばかれる。たとえばスペインの Salamanca にて、明日の対仏戦争に備えて、嵐の中を前戦に赴く英国兵士達を見て Chorus of the Pities は、人間共にはこの嵐が馬鹿げた戦争に対する自然の叱責

である事がわからぬのかと嘆く。“Pain”が“the first thing we instinctively fly from”<sup>(3)</sup>であってみれば、人間が無意識、無感覚な Will に導かれて戦争をすることは明らかで、ここに戦争悲劇の原因がある。Waterloo 大戦も終り近い殺気立った戦場を見おろして Spirits of the Years は次の如く述べる。“Observe that all wide sight and self-command / Desert these throngs now driven to demonry / By the Immanent Unrecking……” (III. VI. viii). Spirit Ironic は戦争の本質を評して“Warfare mere, / Plied by the Managed for the Managers ; / To wit : by frenzied folks who profit nought / For those who profit all!” (III. VI. viii). Spirit Ironic の言うような dynasts と people の関係は、Napoleon とフランス国民との間に最もよく現われ、エルバ島脱出後、パリへ慕進する途中での彼の人気挽回等はよい例である。彼の持つ異常な威力、暗示力に富む演技や言葉に惑わされるフランス人を評して Spirits は次の如く語り合う。Chorus of the Pities, “Strange suasive pull of personality!”。Chorus of Ironic Spirits, “His projects they unknow, his grin unseen!”。Chorus of the Pities, “Their loyal luckless hearts say blindly—He!” (I. VI. ii). 国家安全の為という dynasts の言葉にまどわされ、かつ又戦争の持つ致命的な魅力にとりつかれて夢遊病者の如く闘う諸国民、愛国心からか忠義心からか、いつれにせよ高い人格を持ちながら闘に命を捧げざるをえぬ將軍連、及び権力欲にとりつかれた dynasts は、戦争に関する Spirits の近代的な高い理性に基く判断力、彼らによる高い視点からの戦場の描写、そこにうごめくアリの様な人間共と対照された時、下界の人間が、いともみじめに人間の本能や盲目的衝動を象徴している事は明らかになる。

Spirits に与えられた高度の予言力が、それらを持たぬ人間との間に一種の irony を生じる事がある。たとえばオーストリアの皇太子が Napoleon を評して“the upstart chief”と言い、自分の先祖は遠く歴史の始まりに源を有しているといばりちらすと、Spirit Ironic は“Note that. Five years, and legal brethren they — / This feudal treasure and the upstart man!” (I. IV. iii) とのべ、今度は逆に他の場面では、Napoleon が遠くスペインまで遠征に出ているのを知って強腰に出て来た

オーストリアに対して、Napoleon が毒舌を吐くと、Spirit of the Pities は次のように述べる。“*Has he no heart-hints that this Austrian court, / Whereon his mood takes mould so masterful, / Is rearing naively in its nursery-room / A future wife for him ?*” (II. III. ii). Spirits の言葉は、この両人が将来義兄弟になる仲である事を我々に暗示し、何も知らずに吐き出される人間の言葉と ironic な効果を出す。

Spirits の physical な優越性を見ると、彼等の視点は概して空中高きところにある故、彼等の鳥瞰図的な下界の描写に於て、人間は “insect” や “caterpillar” にたとえられ、この視覚的な人間の大きさは人間の存在価値の大小に直結され、Spirits の目から見ると人間は “animalcula” の如きものである。彼らの目には人間界もさながら “puppetry” “mime” “harlequinade” “phantasmagoric show” であり、人間は “puppet” “a figure on a lantern-slide”, Will は “the deft manipulator of the slide” “showman” である。人間を微少な下等動物にたとえるのは Darwin の影響であろうし、人形芝居は人間を機械化してしまう。かくて Spirits の目により人間は広大な宇宙の粒と化し個性の無い無力な動物となり、これは人間に対しては無情であっても、宇宙に対しては公平な目がとらえた人間の強烈な caricature である。

Hardy が *The Dynasts* にて描いたのは Will に左右される人間の歴史であった。人間の歴史はいつでもよりよき状態に向かって進んでいるとは決して言えぬ。時には脱線し、後退する。というのも愚鈍な或は狡猾な人間が権力を握るという事がしばしばある如く、これが Will のやり方なのである。Napoleon 戦争はよい例であり、ヨーロッパ諸国は彼の一挙一動に動揺し、知識人や人道主義者の声は戦火にかき消され、Spirit of the Pities のいう如く教会も “earthly duress” にせまられ、Napoleon の如き俗人を歓迎せねばならぬ。人間の中にも優れた頭脳や勇気を持った者も居るが、それらも時には誤用される。たとえば Ney 将軍が、Waterloo にて向かう見ずな決死の闘を狂人の如くつづける様を見て Spirit of the Pities は次の如く嘆く：“*Why should men's many-valued motions take / So barbarous a groove !*” (III. VII. iv). 最も好い例は Napoleon で、彼の知性は Will に仕える為に特に鋭くなり、正確で迅速な判断力と、

敵の作戦を見抜く超人的な洞察力で成功を得る。彼の勝れた頭脳と勇気とは結合し、大規模な征服を可能にした要因となったのである。

同時に又、地上の人間は利己的な dynasts と愚鈍な国民を象徴し、The Spirit of the Years と the Pities はそれぞれこの点を次の如く表現している。“We shall see / Again men’s passions, virtues, visions, crimes, / Obey resistlessly / The mutative, unmotived, dominant Thing……” (Ⅱ. Ⅱ. iii). “On earth below / Are men-unnatured and mechanic-drawn — / Mixt nationalities in row and row, / Wheelieg them to and fro / In moves dissociate from their souls’ demand, / For dynasts’ ends that few even understand !” (Ⅲ. Ⅴ. iv). そして Spirits の持つ知性、洞察力、判断力、同情心は、人間誰も持つこのような性質と、因習的な考えを捨て自由で合理的精神を持った人道主義者、知識人、文人等の物の考え方を象徴しているといえよう。だがこのような特性を与えられた Spirits は、physical には、Will の作用を映し出す単なる仮空の鏡の如き存在にすぎぬし、spiritual には次のような存在なのである。Chorus (aerial music) “…Our incorporeal sense, / Our overseeings, our supernal state, / Our readings Why and Whence, / Are but the flower of Man’s intelligence ; / And that but an unreckoned incident / Of the all-urging Will, raptly magnipotent.” (Ⅰ. Ⅴ. viii). そして下界はいつまでも続く悩みと苦痛、陰謀と欺瞞、殺戮と破壊の世界であり、この作品は宿命論に満ちているといわざるをえぬ。だが Hardy は、人間を、この世を、なげやりに捨て去るような事はしなかった。Chorus of the Years (aerial music) “Nay, nay, nay ; / Your hasty judgments stay, / Until the topmost cyme / Have crowned the last entablature of Time. O heap not blame on that in-brooding Will ; / O pause, till all things all their days fulfil !” (Ⅰ. Ⅴ. v).

残酷な Napoleon も悪夢に襲われ、自分の野望の犠牲になった者達の亡霊に悩まされ次のようにつぶやく。“Why, why should this reproach be dealt me now ? / Why hold me my own master, if I be /

Ruled by the pitiless Planet of Destiny?" (Ⅲ.Ⅴ.iii). この悪夢を仕掛けるのは Spirit Ironic であって、この夢は Napoleon の dilemma を象徴している。もしも彼が自分の不正を運命のせいにする事が出来るなら、苦しむ事はない。Will とは、単一物であり、その現われである人間は、本性に於て自他の区別はなく、他人への加害も自分への加害に等しい。この真理を漠然と感じるのが良心の苛責であり、不正を行う者を満たしている認識である。(4) Hardy は 1890年の note に次の如く記している。“Altruism, or The Golden Rule, or whatever “Love your Neighbour as yourself” may be called, will ultimately be brought about I think by the pain we see in others reacting on ourselves, as if we and they were a part of one body. Mankind, in fact, may be and possibly will be viewed as members of one corporeal frame.”(5) かくて、良心の苛責から逃れえぬ Napoleon の宿命性が、Spirit を用いた dramatic な手法により外部からの強制的な力の如く象徴されている。又、我々は反戦論を人間界から聞く事もたまにはある。たとえば、第三部第五幕第五場のイギリス議會の場で、野党議員 Burdett は次の如く演説する。“I have beheld the agonies of war / Through many a weary season ; seen enough / To make me hold that scarcely any goal / Is worth the reaching by so red a road……”。幾多の大戦を見て来た我々読者の気持にも、*The Dynasts* も終りに近いこの場面での彼の発言はびったりであり、かつ人間である Burdett が、今まで Spirits の繰返して来た反戦論を、国運を決める議會の場で真向からとりあげ、野党派としてその演説内容は少々割引きして考えねばならぬとしても、人間と Spirits との覚醒の差は縮められている。又、つかの間の休戦時間を利用して、小川に水を飲みにやって来た敵同志の兵士らが、両岸から手をさし伸べあって握手をする場面も Spirits により同情深く語られる。戦争の非人道性、不合理性を理解するには必ずしも高い知性を必要とはせぬ。知性の凡庸な人間でも充分なる道德性や博愛精神を持ちあわせている。何故なら同情というものは、良心の苛責と同様その根拠を形而上的真理に基づく人間の本性の中に有しているからである。つまり自分と他人との個体間の唯我的な差別を認めぬ事である。同じくこの世に苦しみを受ける者同志であるという意識は、自己超越を我々に

可能にせしめ、人々を結びつけ孤立感を超越せしめる。下界にもこのように人道主義に基づく行為は見受けられるが、宿命論一色で作品を塗りつがすとしても、人間を取扱かっている以上、かかる面が表われるのは当然である。Hardy のいかなる悲劇を読んでも我々が必ず感じるのは、彼の人間に対する並々なぬ興味であり、それが我々に、いかに宿命の世界をみせつけながらも、同時に人間みな同胞感を感じさせる原因である。The Dynasts の華やかな歴史的場面、素朴な Wessex の村人の場面、一種独特の集団美を呈する大軍の動きの鳥瞰図に、つきせぬ興味を与える人間社会に、というよりも、もっと原始的な人間の集りというものに対する、深く、胸躍るような作者の関心がにじみ出ている。The Dynasts の artistic representation は、暗い宿命観を象徴しているが、その構造のこみ入った虚構性、審美的統一は、この作品を life is meaningless とする者の作とはせぬ原因ともなっている。人生とは如何に空しいものであっても変化にとみ複雑であり、人間の形而上的存在と形而下的存在の対立は、宇宙構造を更に複雑化しているが、Hardy はこれらすべてを独自の方法にてまとめあげ、一巾の巨大な絵巻物を創造したのである。

Hardy にあっては、人間の知性の高度な発達も、Schopenhauer の如く、Will の断滅に、この世の崩壊に導くものではなく、Will の覚醒によるこの世の改善へと向うものである。故に Hardy の宿命論は決定的なものとは言えず。現実の世界とある程度の妥協性を有している。Hardy にとって、地上の世界は宇宙構造の内でも、絶えず変化する外面のみを示すという意味に於て、Will の真相ではなく単に外観のみを示すものであるが、この世は現に存在し、この現象界に於て loving-kindness の世界は到来するのである。これは humanism のあらわれである。人間界が慶事にうかれている時に、その陰にある暗い面を Spirits があばき出すのも “if way to the Better there be, it exacts a full look at the Worst”<sup>(6)</sup> という Hardy の持論をよくあらわすものであって、我々も Spirits のとらえる人生の暗黒面を直視してこそ、真に明るい世界への道を発見し得るのである。

The Dynasts に於ては、作品の tone や構成が作者の宇宙論の芸術的

表現手段となっている事が特色と言え、今までの考察もその点に焦点をあてて来た。超自然かつ崇高で悲劇的なこの作品の tone を出すのに Spirits は大役を果して居り、作品の構成面に於ても、Spiritsこそは Hardy の思想の dramatic-equivalent であり visible essence である故、このように具象化された抽象概念が、epic-drama の構成を決定し、宇宙に於ける Will と人間との関係及び Will に誘導される人間の内面が、下界で起る外的な dramatic action を内包する更に大きな構成をなし、この二重構造が作品を超自然化し、その中に苛酷な宿命論、近代的な進化論が包みこまれている。

Spirits は人間の心の中の微妙な変化を劇化し、無意識より意識への衝動を伝え、一人の人間の心を他人の、或は宇宙の心に交流させ、死を予告して人間を驚かし、又は地球を一瞬にして飛び廻るのである。つまり Spirits のとらえる世界は大宇宙について言えば、その内面の本性を描き出し、一人の人間の行為から、人類の歴史に到るまで、すべて Will の定めたものである事を示し、小宇宙とも言える一個の人間については、その奥深い内面をとらえ、明るい知性がしばしば本能的衝動に負ける様を描くが、この大宇宙と小宇宙とは結局同一物、つまり Will の世界であり、決定論の支配する世界である。

これらの Spirits の機能は、只 Will の世界を象徴するためのものである。つまり Hardy は、metaphor や simile の如き言葉の段階にて Will を描くばかりでなく、これらよりもより高次の段階で、つまり作品の構成や構成要素そのものを利用して Will の世界を象徴している。Spirits も人間も各々そのものとして存在しているのではなく、ある1つのもを象徴する為にあのように語り活動するのである。

かくて Will は何かしら obscure, infinite, mighty, terrible なものとして我々の眼前に立ち塞がり、恐怖と不安を与える。作品全体は当然 symbolic な世界となり、虚構性は高度に発展され、literally に真でないものが真でないが故に、そこに面白さと独特の説得力をもって真実を説いている。つまり我々は厭世哲学の体系を読んで絶望感をあらたにするが、宿命の色こい *The Dynasts* をよんで我々が得るのは只絶望だけではない。我々は深く考えさせられるが、それは人生から離れる為のものではなく、より近づく為のものである。そしてこのように我々を人生の内面へとひっ



ぱりこむ力が Hardy の art の力であって、はからずもここには Hardy の人生に対する真の気持ち及び人生一般の真の姿があらわれている。人生とはかくも苦痛と災に満ちたものであるのに、我々は根強い執着を持っている。

Will の世界の芸術的表現の意義はここにあり、宿命の世界を描きながらも Hardy の art は我々をひきつける。我々に人間を、人間社会を捨てさせてしまえば芸術作品の意義も無に帰するであろう。 *The Dynasts* に於ける意志哲学の芸術的表現の大役を果しているのは *Spirits* であり、彼等の如き、人間界の拘束を破った高き視野を持つ第三者がいてこそ *The Dynasts* は救いなき宿命の世界と同時に人間の歴史の不思議な魅力をかもし出すのである。

最後に次の文を引用しておきたい。 “.....while philosophy treats of ideas without forms, and science gives us forms without ideas (these two methods being often combined), the function of art is to produce forms that shall represent ideas ; and such artistic form is an “entirety”, real by virtue of the idea that it reveals.”<sup>(7)</sup>

〔註〕

- ① ショーペンハウエル著、増富平蔵訳「宇宙及人生」、  
原名「意志及び心識としての世界」、  
玄黄社。昭和10年。第4巻第52章及び第1巻の補説第2章。
- ② 同上、第4巻の補説第41章。
- ③ F. E. Hardy, *The Life of Thomas Hardy*,  
Macmillan. 1962. p. 452.
- ④ ショーペンハウエル著、増富平蔵訳「宇宙及人生」、第4巻第60章。
- ⑤ F. E. Hardy, *The Life of Thomas Hardy*, p. 224.
- ⑥ Thomas Hardy, “In Tenebris”, *The Collected Poems of Thomas Hardy*, Macmillan. 1962. p. 154.
- ⑦ H. B. Cotterill, *An Introduction of the Study of Poetry*,  
Kegan Paul, Trench & co. 1882. p. 36.